

理によらないものであり、またリサルが思い描く祖国の情景や文化も、自身を育んだ植民地の「メスティーソ文化」が無意識のうちに前提されたという。一方第3章で取り上げた聖ヨセフ兄弟会は、貧しい人々の救霊という目的に対応して、メスティーソの入会を禁止していた。ここからメスティーソも含む国民概念が広く定着するまでには、大きな隔たりがあるように思われる。すなわち、国民概念はいつ頃、どのようにして民衆レベルにまで浸透したのか、それはどのような内容のものだったのかという問いは、あらためて意味を持つのではないだろうか。

以上のように、本書はフィリピン革命の総合的な研究であると同時に、まさに「革命という時代のうねり」に至る19世紀フィリピンの「通史」でもあり、そこからさらに多くの研究課題が着想されうる見事な作品であると思う。

(内山史子・都留文科大学教養学部)

参考文献

- Aboitiz, Nicole C. 2020. *Asian Place, Filipino Nation: A Global Intellectual History of the Philippine Revolution, 1887–1912*. New York: Columbia University Press.
- アンダーソン, B. 2012. 『三つの旗のもとに——アナーキズムと反植民地主義的想像力』山本信人(訳). 東京: NTT出版. (原著 Anderson, Benedict. 2006. *Under Three Flags: Anarchism and the Anti-Colonial Imagination*. London: Verso.)
- Claudio, Lisandro E. 2018. *Jose Rizal: Liberalism and the Paradox of Coloniality*. Cham: Palgrave Macmillan.
- Cullinane, Michael. 2014. *Arenas of Conspiracy and Rebellion in the Late Nineteenth-Century Philippines: The Case of the April 1898 Uprising in Cebu*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.
- Guerrero, Milagros C. 2015. *Luzon at War: Contradictions in Philippine Society, 1898–1902*. Mandaluyong City: Anvil Publishing.
- Ileto, Reynaldo C. 2021. The Road to 1898: On American Empire and the Philippine Revolution. *The Journal of Imperial and Commonwealth History* 49(3): 505–526.
- Mojares, Resil B. 2006. *Brains of the Nation: Pedro Paterno, T. H. Pardo de Tavera, Isabelo de los Reyes and the Production of Modern Knowledge*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.
- Richardson, Jim. 2013. *The Light of Liberty: Documents and Studies on the Katipunan, 1892–1897*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.
- 高木佑輔. 2018. 「研究展望 21世紀のフィリピン政治研究——構造から制度、制度から人、人から地域へ」『東南アジア——歴史と文化』47: 68–80.
- 平田晶子. 『ラオス山地民とラム歌謡——内戦を生き抜いた宗教・芸能実践の民族誌』風響社, 2023, 365p.
- 本書は、山地ラオにおけるラム歌謡をめぐる民族誌である。東南アジアの伝統音楽を知る人なら、インドネシアのガムランやクロンチョンと並んで、タイのルークトウンやモーラムの名は聞いたことがあるだろう。モーラムは竹製管楽器ケーンのリズムミカルな旋律に合わせて歌う歌謡芸能で、タイではイサーン（東北部）を強く想起させる音楽ジャンルだ。しかし、本書が扱うのは、ラオス中部のオーストロアジア系、ソーの人びとのラム歌謡である。彼らにとって音楽とは何かを、音楽芸能、治療儀礼、精霊儀礼、オンライン音楽配信など多様な切り口から論じる。
- 著者は、2009年から2011年にかけて、ラオス人民民主共和国にて現地調査を実施し、その成果をまとめた博士論文をもとに執筆したのが本書である。興味深いことに、著者は、村落調査でケーン演奏家（モーケーン）とラム歌手（モーラム）の家に間借りをし、そこでケーンを習得して公演で舞台にも立ったことがあるという。旋律の紹介では五線譜への採譜も示され、豊かな音楽的造詣を背景にラム歌謡の過去と現在を描き出した秀作である。
- 本書の構成は以下の通りである。
- 第I部 オンライン状況下の在来音楽の民族誌

的記述に向けて

- 第1章 序論
- 第2章 民族誌的探求の背景——調査村の概観
- 第Ⅱ部 五感統合の軸——伝統文化の維持
- 第3章 ラムとは何か
- 第4章 民間治療とラム歌唱——紡がれる祖先と子孫の社会関係
- 第5章 感覚器間相互作用を活かした創造的な調整行為——仏教化を背景に
- 第6章 五感統合の音楽的行為——複数の精霊との遊びの事例
- 第Ⅲ部 五感分断の軸——在来音楽配信のオンライン化
- 第7章 多感覚の減縮に伴う音楽経験
- 第8章 総括と討論

第1章では、本書の課題として、「ラム歌謡の音楽芸能が経済的および宗教的活動の一環として営まれるなかで、多様な民族間関係がありながらも、いかにエスニシティの交渉されるアリーナが形成されているか」(p. 15) が示され、次に人類学での音楽研究の系譜がまとめられる。音楽人類学では、かつては閉じた伝統社会におけるローカル音楽が記録されてきたが、1980年代以降、西洋中心のグローバル音楽産業へのアンチテーゼとして「ワールドミュージック」がジャンルとして定着すると、民族性と文化表象のあり方をめぐる研究が深められてきた。特に商業化の過程で差異化が激化するという「分裂生成」[Bateson 1958; Feld 1996] の概念を紹介して、第Ⅱ部以降の議論の布石とする。またラムという語の含意(歌、歌う行為、歌い手など)と、ラオスにおいてラム歌謡が国民文化として位置づけられるまでの経緯がまとめられる。

続く第2章では、調査地の概観を描出する。主たる調査地P村は、ビエンチャンから南東に466 km 進んだサワンナケート県に位置する。古くからラオ、クメール、チャムなどが混住し、カンボジアやベトナムと繋がる街道の交差点に当たるラオス中部の要衝である。P村にはソー(ブルー・ソー)、ラオ、プータイが居住するが、民族名称のソーには注意が必要だ。彼らの民族自称は一定しておら

ず、2009年の調査開始時から、ソー、ブルー、マコン、カタンなど流動的であることに加え、婚姻や教育、メディアの影響で、ラオ化が進んでいるという。キーインフォーマントは、ソーのモーケンとモーラムの夫婦で、村落住民の経済状態や、歌唱能力と呪術との関係などが紹介される。

第Ⅱ部では、ラム歌唱の諸実践を通じて、五感を統合した音楽経験を多角的に検討する。まず第3章では、調査地で代表的な4つの旋律を楽譜で示し、それぞれどのような機会に演奏されるのかを詳述する。たとえば、ラオによって歌い継がれてきた旋律ラム・コーンサワンはハ長調に近い明るい音階で、仏教寺院で貝葉の朗唱時に用いられるほか、若い男女が一晩中ラムを朗唱する出会いの場(コップ・ンガン)でも歌われたりした。これに対して、暗い曲調の別の旋律は、治療儀礼や精霊供養で用いられることが多いという。また、もともとブルー語で歌われたラム・クロンニョの旋律は、ラオス語化することで東北タイを含む大規模な音楽市場でも流通したが、同時に言語の選択的な利用によって芸能実践のなかで民族間関係が再定義される局面が描き出される。

第4章ではラム歌謡による治療儀礼を分析する。P村周辺では保健所や病院など近代医療が利用できるが、卜占を通じたヤオ治療も継続している。高齢女性の多い呪医モーヤオは、龍神の憑依や祖霊との交信によって治療を行い、その過程でケーンの伴奏のもとラムを歌唱する。精霊を供応したり祖霊の要望に応えたりすることで、本来人に宿る靈魂クワンを取り戻し、病者の状態を回復させるという。ヤオ治療では、ラム・タンスーイ旋律の歌唱に加えて、卵や刀剣、ろうそく、キンマなどの供物が準備される。治療の場において、聴覚・触覚・嗅覚を通じて祖霊の記憶を生起させ、社会関係を再確認させるものとしてヤオ治療を分析する。

第5章は、祖先崇拜で奉納されるラム歌謡を取り上げる。調査村では、ピータダーとニヤーポーという二つの守護霊への信仰が見られる。前者はプータイ、後者はラオ起源の信仰で、奉納するラム歌謡の旋律や言語、供物の種類によって、在来の祖霊信仰との「調整」が図られるという。特に

新米で作られる粽菓子や、儀礼の最中に飲まれる酒やビールを通じて、視覚と聴覚だけでなく、味覚や嗅覚も含めた感覚器官の相互作用が引き起こされる。多感覚の経験に基づく記憶の再現装置として守護霊祭祀が位置づけられる。

第6章は、モーヤオなどによる精霊儀礼（リアン・ピー）を、「精霊との遊び」[ホイジンガ 2019; 岩田 1986]と位置づけて、その感覚的経験を検討する。ケーンの伴奏でラム歌謡を一晚中歌いながら、多様な供物を捧げると、霊媒に次々と守護霊や精霊が憑依する。村人たちも音楽に合わせて共に踊りながら精霊たちを供応する。供物には、木で彫られた玩具、生花で作られた冠や襷、ココナッツ果汁、湯がいたセンダンなどが含まれ、人びとは供物の種類によって憑依する精霊を識別する。ラム歌謡の音や言葉、花の香りや食物の味など多様な感覚の相互作用を通じて精霊の存在を経験するという。

第III部は、ラム歌謡のオンライン配信によって引き起こされる五感の分断について検討される。第7章は、在来音楽がグローバルな音楽市場に参入し、音楽配信のオンライン化を契機に、いかなる変化が起きているのかを記述する。もともとラム歌謡の音楽実践は五感を統合的に刺激する身体経験であったが、YouTubeなどのインターネット動画共有サービスを通じて世界に広がると、音楽が見る／聞く対象に縮減される。しかし、視聴者は、演奏される旋律を聴き分け合ったり、背後にある草花や衣装、小道具を見て、故郷での懐かしさを追体験したりして、動画にコメントの投稿を行って意見が交わされる。その意味では、オンラインコミュニティであっても、過去を記憶する経験の身体があるかぎり、五感統合の身体感覚を刺激するものであり、ラム歌謡の役割は維持されていると論じられる。まとめの第8章では、これまでの議論を総括したうえで、「どのような状態に置かれても人間は音楽を楽しむ心を持ち続け、愉しむ場を作り出す生きもの」として本書が締めくくられる。

本書の魅力的な点は、第一に、主題であるラム歌謡という音楽実践が、芸能だけでなく伝統医療や精霊祭祀とも連動することを示した点にある。

しかもモーラムで一般にイメージされるタイ・カダイ系ではなくオーストロアジア系、ラオスの中でもマジョリティの低地ラオではなく山地ラオのソーが奏でるラム歌謡という点、さらにサワンナケート県という人の移動が活発な空間における、ラオ化や仏教化がまさに進行中の状況の記述は民族誌的資料としても貴重なものといえよう。ただ論点が芸能のみならず、医療や宗教など多岐にわたるがために、個別の議論については少し物足りなさを感じる部分もある。たとえば「仏教化」を論じる際に、何がどのように「仏教化」されたのかは、本書の主たる関心でないためにあまり論じられない。「精霊の出入居祭」(p. 118)など興味を引く儀礼にも言及されているだけに、P村における仏教の現状や、精霊信仰と仏教の距離について、さらに掘り下げられれば東南アジア大陸部の宗教研究への貢献もさらに深まるだろう。

もう一つの本書の重要な論点は、感覚的経験をめぐる記述である。たとえば、守護霊祭祀で演奏される旋律について「二短調（D Moll）でDm7とFmの和音で奏でられる。主音の『レ』がリズムを刻みながら鳴っている」（p. 197）といった記述から、多少の音楽の素養があれば原音を聴覚的に想像することは難しくないだろう。また嗅覚についても、供物を準備する場での香りについて次のように表現されている。

両手に持った献花がU字を描くように左右に大きく振られるたびに、プルメリアやランの花の香りがふわりと漂う。花の芳香に包まれながら、彼女たちは、まるで花の香りに酔いしれるような眼をしながら、恍惚とした状態でゆっくりと支柱の周りを旋回した。（p. 236）

特に嗅覚的経験を文字で記述することには困難を伴うが、著者は手の込んだ情景の記述を通じてラム歌謡に関連する感覚的経験を丁寧に描出することに成功している。フィールドの描写を丹念に読むと、音や香りが読者の周りに広がるように感じるだろう。

こうした記述をもとに、著者は、五感が相互に刺激し合う「感覚器間相互作用」という概念を軸

に分析を進める。第Ⅱ部では、複数の感覚が統合されて過去の記憶を呼び覚ますことを、ラム歌謡儀礼の特徴として指摘するが、この部分については少し注意が必要であろう。本書では、感覚の記述の際に、伝統的な五感の区分けを前提としているが、もう少し異なる見方も可能ではないだろうか。たとえば、村のラム公演の情景にあった「踊りのステップで舞い上がった土埃」(p. 146)の体験、またはブルー語で歌われるラム・クロンニョを聞いたときの感情を抑制できない叫び声(「アコーイ」「オーイ」「ニュッ、ニュッ、ニュッ」)が上がる局面(pp. 148-150)、さらにラム・ピーを聞いたときの「つい踊り出したくなる気分」(p. 196)は、特定の感覚器の統合というよりは、ある種の無意識的で身体的な反応であり、個別の感覚として捉えられたり言語化されたりする以前の、情動とも呼ぶうるものであろう[Massumi 1995]。おそらく著者の主たる関心は、古代ギリシャ由来の「五感」の分析ではなく、身体的な感覚の統合にあると思われるので、個々の感覚器の働きでは捉えたい感覚的経験が、ソーの人びとに、またインターネットを通じて世界の人びとにどのように体感されているか、意味づけられているかを問うことが今後の課題になるであろう。

とはいえ、ラム歌謡が単なる音楽芸能に留まらず、ソーの人びとの宗教生活、また民族と国境を越えたオンライン空間へと広がりをもつことを、

豊かな身体経験の記述とともに描き出した本書の価値は非常に高い。在来音楽を出発点として多様なベクトルを示しており、身体とローカルとグローバルをつなぐ民族誌の一つの可能性を呈示するものといえるだろう。

(津村文彦・名城大学外国語学部)

参考文献

- Bateson, Gregory. 1958. *Naven: A Survey of the Problems Suggested by a Composite Picture of the Culture of a New Guinea Tribe Drawn from Three Points of Views*. Stanford: Stanford University Press.
- Feld, Steven. 1996. From Schizophonia to Schismogenesis: The Discourses and Practices of World Music and World Beat. In *The Traffic in Culture: Refiguring Art and Anthropology*, edited by George E. Marcus and Fred R. Myers, pp. 96-126. Berkeley: University of California Press.
- ホイジンガ, ヨハン. 2019. 『ホモ・ルーデンス』高橋英夫(訳). 東京: 中央公論新社. (原著 Huizinga, Johan. 1949. *Homo Ludens: A Study of the Play-Element in Culture*. London: Routledge & Kegan Paul.)
- 岩田慶治. 1986. 『人間・遊び・自然——東南アジア世界の背景』東京: 日本放送出版協会.
- Massumi, Brian. 1995. The Autonomy of Affect. *Cultural Critique* 31: 83-109.